

農業気象技術対策資料

# 梅雨前線豪雨に対する技術対策資料

平成23年6月

農産園芸課

## 1 水 稲

- ( 1 ) 浸水や冠水した場合は、早急な排水を行う。なお、浸・冠水した稲は、体内水分を失いやすいので、水田を急に乾かさない。
- ( 2 ) 冠水圃場における性急な窒素の追肥は、稲を軟弱化し、病害虫の発生や倒伏を助長するので、1週間程度は成育状況をみて行う。
- ( 3 ) 退水後は、白葉枯病・いもち病等の病害防除の徹底を図る。
  - ア 白葉枯病は退水後と止葉抽出期前の防除を徹底する。
  - イ いもち病は退水後と穂ばらみ期の防除を徹底する。
- ( 4 ) 稲の地上部が緑色を呈するものや、排水後1週間の経過をみて新根の発生がみられるものは、回復の見込みがある。
- ( 5 ) 新根の発生が無く回復不可能な場合は植え直しを行うか、大豆や野菜等への転作を行う。植え直す場合は乳苗で対応すると成育の遅れを軽減できる。
  - ア 田植えの晩限は7月下旬頃までとし、品種は早生品種を用いるが、晩期栽培ではいもち病が出やすいので、耐病性品種を用いるとともに防除に努める。
  - イ 大豆へ転作する場合、フクユタカの播種晩限は7月20日頃である。
- ( 6 ) 大雨でオーバーフロー（水が水田からあふれる状態）の恐れのある場合は、水稻除草剤の散布を延期する。

## 2 大 豆

- ( 1 ) 圃場が冠水した場合は、できる限り早く排水に努める。
- ( 2 ) 土壌の乾燥を待って、中耕・培土等により草勢の回復を図る。
- ( 3 ) 回復の見込みのない場合は、播き直すか野菜等への転換を図る。播き直す場合はフクユタカであれば、7月20日頃まで播種可能である。その場合は播種量を10～20%増やす。
- ( 4 ) 成育初期に湿害を受けた大豆は、その後の成育が著しく劣るので、播き直す方が良い。
- ( 5 ) 湿害を受けた大豆はその後の成育量が劣り、雑草が繁茂しやすく中耕・培土だけでは抑えることができないので、登録のある茎葉処理剤で除草する。

## 3 野 菜

- ( 1 ) 浸水や冠水していた圃場では、退水後軽く土寄せし露出部を覆う。圃場が乾いたら軽く中耕して、土壌の通気性を高める。
- ( 2 ) 病害の多発が予想されるため、疫病、べと病、灰色かび病、炭そ病などを重点に早急に防除する。散布むらのないよう葉裏まで丁寧に散布する。
- ( 3 ) 速効性肥料を10a当たり窒素成分で1.0～1.5kg程度施用する。また、果菜類では液肥を散布し、成育の早期回復を図る。
- ( 4 ) 果菜類では不良果を中心に摘果を行い、果実負担を軽減して草勢の回復を促す。

## 4 果 樹

- ( 1 ) 傾斜地園では草生管理とし、表土の流亡を防ぐ。
- ( 2 ) 極度な乾燥からの水分過剰は、裂果の多発や根傷み・根腐れによる樹勢低下を招きやすい。排水の悪い園地では排水路を設置し、水が停滞しないように努める。
- ( 3 ) 土砂崩れ等で埋没、流出の被害を受けた園では、安全性を確認の上、埋没、

流出樹の処理及び園地の整備を行い、二次災害を防止する。

- (4) 冠水、浸水した園では早期排水に努め、必要に応じて客土や支柱立てを行い、樹勢低下を防止する。
- (5) 病害の多発が予想されるので、柑橘類では黒点病、かいよう病、カキでは、落葉病、炭そ病、灰色かび病、うどんこ病、ブドウでは黒とう病、晩腐病、べと病、うどんこ病、モモでは灰星病、黒星病、キウイフルーツでは果実軟腐病などの薬剤防除を早急に行う。

## 5 花 き

- (1) 施設の周辺に排水溝を設け、停滞水を早めに除去するとともに、施設内への雨水の流入を防ぐ。露地栽培では畝間の停滞水を速やかに圃場外に排水する。
- (2) 長雨によって、軟腐病や斑点病及び灰色かび病などの発生が懸念されるので、晴れ間をみて薬剤による防除を徹底する。  
また、施設内湿度の上昇によって、灰色かび病などの発生が多くなるので、換気に努めるとともに定期的な薬剤散布を徹底する。
- (3) 長雨時は植物体からの蒸散量が少ないうえ、養水分の吸収も少ないので、過度の灌水や追肥を避ける。  
また、草勢回復のため、曇天日に液肥の1,000倍液を葉面散布する。
- (4) 流入した土砂で埋没したり、水の流入で茎葉損傷がひどい場合は、整地を行ったのち補植するか、他の花き類を植え付ける。  
宿根草で株が残っている場合は、切り戻しを行って仕立てなおす。

## 6 畜 産

- (1) 飼料作物(トウモロコシ、ソルガム)
  - ア 排水の悪い水田転換畑などでは、周辺水路からの水の侵入を防ぐとともに、圃場内に溝をつくり排水に努める。
  - イ 冠水により茎葉に泥土が付着しているものは、散水により洗い落とす。
  - ウ 成育途中のステージでは、成育の回復を図るため、水が引いて1週間後10a当たり窒素成分で1.0~1.5kgを追肥する。
  - エ 根の状態等の観察を十分に行い、回復の見込みがないと判断される場合は、  
草丈が1m程度であれば粗飼料確保の観点から収穫する。  
成育初期であれば早急に播き直しを行う。  
など、状況に応じた対策を講じる。
- (2) 畜舎管理
  - ア 浸水を受けた場合は、畜舎の十分な消毒と家畜の観察を行い、予防処理を講ずる。
  - イ 雨もりの屋根は修繕し、畜舎周辺の排水溝はきれいに清掃する。運動場は雨水により泥沼状態にならないよう排水溝を掘り、くぼ地には排水の良い山土を入れて雨水が溜まらないようにする。